

物性物理学C 第2回レポート 略解

I. 以下のように固定点を求め、そのまわりに線形安定性解析を行う。

(i) 固定点を求めると $4x - x^3 = 0$ より $x = 0, \pm 2$ 。それぞれの固定点について安定性解析をする。

$x = 0$ まわりで $x = 0 + \Delta x$ とおくと、

$$\frac{d\Delta x}{dt} = 4\Delta x + o(\Delta x^2)$$

よって、不安定である。

$x = \pm 2$ まわりで $x = \pm 2 + \Delta x$ とおくと、

$$\frac{d\Delta x}{dt} = 4(\pm 2 + \Delta x) - (\pm 2 + \Delta x)^3 = -8\Delta x + o(\Delta x^2)$$

よって、安定である。

(ii) 固定点を求めると $\frac{dx}{dt} = \frac{dy}{dt} = 0$ より $x = y = 0$ 。

$x = 0 + \Delta x$ 、 $y = 0 + \Delta y$ とおいて代入すると

$$\frac{d}{dt} \begin{pmatrix} \Delta x \\ \Delta y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & a \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \Delta x \\ \Delta y \end{pmatrix}$$

この固有値は $\lambda^2 - a\lambda + 1 = 0$ の解。これは、 $a > 0$ のときには固有値の実部は2つとも正、 $a < 0$ のときには固有値の実部が2つとも負。よって、 $a > 0$ のときは不安定、 $a < 0$ のときは安定。

(iii) $x = 0$ の固定点について考える。

$x = 0 + \Delta x$ とおいて代入し、展開すると

$$\frac{d}{dt} \Delta x = 1 - \left(1 - \frac{\Delta x^2}{2} + o(\Delta x^4) \right) = \frac{\Delta x^2}{2} + o(\Delta x^4)$$

線形の部分 (Δx の1次の部分) だけを見ると0なので中立安定のように思われるが、線形部分が0のときには、高次の項が重要となる。この場合は、 Δx^2 の項が重要となる。常に、 $\frac{d}{dt} \Delta x \geq 0$ があるので、 $\Delta x < 0$ ならば0に収束していくが、 $\Delta x > 0$ ならば無限大に発散していく。「安定」の定義は「どんな摂動に対しても固定点に収束する」ことであるが、この場合は、 $\Delta x > 0$ の摂動を与えると発散するので、 $x = 0$ の固定点是不安定。

II. (i) ロジスティック方程式

$$\frac{dx}{dt} = x(1-x)$$

は変数分離することにより解くことができる。

$$\int_{x_0}^x \frac{dx'}{x'(1-x')} = \int_0^t dt'$$

$$\int_{x_0}^x \left(\frac{1}{x'} + \frac{1}{1-x'} \right) dx' = \int_0^t dt'$$

これを解くと、

$$[\ln|x| - \ln|1-x|] - [\ln|x_0| - \ln|1-x_0|] = t$$

$$\ln\left|\frac{x}{1-x}\right| - \ln\left|\frac{x_0}{1-x_0}\right| = t$$

これより、

$$\frac{x(1-x_0)}{x_0(1-x)} = \exp(t)$$

$$\frac{1-x_0}{x_0}x = (1-x)\exp(t)$$

となり、

$$x = \frac{1}{1 + \frac{1-x_0}{x_0}\exp(-t)} = \frac{x_0}{1 + (1-x_0)\exp(-t)}$$

$x_0 > 0$ の条件があるので、常に x は 1 に収束する。

- (ii) 固定点は $x = 0, 1$ 。 $y = x(1-x)$ のグラフを考えると、 $0 < x < 1$ で正、 $x > 1$ で負となる。 よって、 $0 < x < 1$ にあるときには増加し、 $x > 1$ にあるときには減少する。 このことから、 $x = 0$ は不安定固定点、 $x = 1$ は安定固定点と考えられ、 厳密解の挙動と一致する。
- (iii) $-x \ln x = 0$ より、 $x = 1$ が固定点。 また、 $\lim_{x \rightarrow +0} x \ln x = 0$ より $x = 0$ も固定点に準じて考えることができる。 $y = -x \ln x$ のグラフを考えると、 $0 < x < 1$ で正、 $x > 1$ で負になる。 ちなみに、この微分方程式は変数分離系で解くことができる。 その結果得られる解は

$$x = \exp[\ln(x_0)\exp(-t)]$$

である。

III. $z = x + iy$ とおいて代入すると、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}(x + iy) &= (a + i\omega)(x + iy) - (1 + ib)(x^2 + y^2)(x + iy) \\ &= [ax - \omega y - (x^2 + y^2)(x - by)] + [\omega x + ay - (x^2 + y^2)(y + bx)]i \end{aligned}$$

それぞれ実部と虚部の方程式を書くと

$$\begin{aligned} \frac{dx}{dt} &= ax - \omega y - (x^2 + y^2)(x - by) \\ \frac{dy}{dt} &= \omega x + ay - (x^2 + y^2)(y + bx) \end{aligned}$$

これを極座標 $x = r \cos \theta$ 、 $y = r \sin \theta$ に変換する。 $\frac{\partial r}{\partial x} = \cos \theta$ 、 $\frac{\partial r}{\partial y} = \sin \theta$ 、 $\frac{\partial \theta}{\partial x} = -\frac{\sin \theta}{r}$ 、 $\frac{\partial \theta}{\partial y} = \frac{\cos \theta}{r}$ を用いると、

$$\begin{aligned} \frac{dr}{dt} &= \cos \theta [ax - \omega y - (x^2 + y^2)(x - by)] + \sin \theta [\omega x + ay - (x^2 + y^2)(y + bx)] \\ &= ar - r^3 \\ \frac{d\theta}{dt} &= -\frac{\sin \theta}{r} [ax - \omega y - (x^2 + y^2)(x - by)] + \frac{\cos \theta}{r} [\omega x + ay - (x^2 + y^2)(y + bx)] \\ &= \omega - br^2 \end{aligned}$$

複素数表示から求めようとする、 $z = re^{i\theta}$ とおいて代入する。

$$\frac{d}{dt}z = \frac{dr}{dt}e^{i\theta} + ire^{i\theta}\frac{d\theta}{dt}$$

かつ、

$$\frac{d}{dt}\bar{z} = \frac{dr}{dt}e^{-i\theta} - ire^{-i\theta}\frac{d\theta}{dt}$$

より

$$\begin{aligned}\frac{dr}{dt} &= \frac{1}{2} \left[\frac{dz}{dt}e^{-i\theta} + \frac{d\bar{z}}{dt}e^{i\theta} \right] = \Re \left[\frac{dz}{dt}e^{-i\theta} \right] = \Re \left[(a + i\omega)r - (1 + ib)r^3 \right] = ar - r^3 \\ \frac{d\theta}{dt} &= \frac{1}{2ir} \left[\frac{dz}{dt}e^{-i\theta} - \frac{d\bar{z}}{dt}e^{i\theta} \right] = -\frac{i}{r} \Im \left[\frac{dz}{dt}e^{-i\theta} \right] = -\frac{i}{r} \Im \left[(a + i\omega)r - (1 + ib)r^3 \right] = \omega - br^2\end{aligned}$$

IV. $\Delta\theta = \theta_2 - \theta_1$ とおくと

$$\frac{d\Delta\theta}{dt} = -K \sin(\Delta\theta - \alpha) - K \sin(\Delta\theta + \alpha) = -2K \cos \alpha \sin \Delta\theta$$

となる。 $\frac{d\Delta\theta}{dt} = 0$ を満たすのは、 $\cos \alpha \neq 0$ でなければ、 $\theta = 0, \pi$ 。

安定性は、 $\theta = 0, \theta = \pi$ での傾きが重要であり、傾きは $\cos \alpha$ の符号による。これを考慮して、

- $\cos \alpha > 0$ 、つまり、 $0 \leq \alpha < \frac{\pi}{2}$ 、 $\frac{3\pi}{2} < \alpha \leq 2\pi$ のときには、 $\theta = 0$ が安定、 $\theta = \pi$ が不安定。
- $\cos \alpha < 0$ 、つまり、 $\frac{\pi}{2} < \alpha < \frac{3\pi}{2}$ のときには、 $\theta = 0$ が不安定、 $\theta = \pi$ が安定。

V. (i) 固定点を求めるため、 $a_n = a_{n+1} = a_\infty$ とおいて、 $a_\infty = 3a_\infty - a_\infty^3$ より $a_\infty = 0, \pm\sqrt{2}$ 。

まず、 $a_n = 0$ について、 $a_n = 0 + \Delta a_n$ とおいて代入すると、

$$\Delta a_{n+1} = 3\Delta a_n + o(\Delta a_n^2)$$

より不安定。

次に、 $a_n = \pm\sqrt{2}$ について

$$\pm\sqrt{2} + \Delta a_{n+1} = 3 \left((\pm\sqrt{2} + \Delta a_n) - ((\pm\sqrt{2} + \Delta a_n))^3 \right) = 3 \left((\pm\sqrt{2} + \Delta a_n) \mp 2\sqrt{2} - 6\Delta a_n + o(\Delta a_n^2) \right)$$

よって、

$$\Delta a_{n+1} = -3\Delta a_n + o(\Delta a_n^2)$$

これより $a_n = \pm\sqrt{2}$ は不安定。

(ii) 固定点を求めるため、 $a_n = a_{n+1} = a_\infty$ とおいて、 $a_\infty = \frac{a_\infty}{2} + \frac{1}{a_\infty}$ より $a_\infty = \pm\sqrt{2}$ 。

$a_n = \pm\sqrt{2} + \Delta a_n$ とおいて代入すると、

$$\pm\sqrt{2} + \Delta a_{n+1} = \frac{\pm\sqrt{2} + \Delta a_n}{2} + \frac{1}{\pm\sqrt{2} + \Delta a_n} = \frac{\pm\sqrt{2} + \Delta a_n}{2} \pm \frac{1}{\sqrt{2}} \left(1 \mp \frac{\Delta a_n}{\sqrt{2}} + \frac{\Delta a_n^2}{2} \right) + o(\Delta a_n^3)$$

よって、

$$\Delta a_{n+1} = \pm \frac{1}{2\sqrt{2}} \Delta a_n^2 + o(\Delta a_n^3)$$

Δa_n が小さい時、0 に収束するので、 $a_n = \pm\sqrt{2}$ は安定。

VI. VII. 略

講義のシラバス・資料など：<http://cu.phys.s.chiba-u.ac.jp/lecture/busseiC/>

北畑の連絡先：kitahata@physics.s.chiba-u.ac.jp, TEL:043-290-3723